

日本では「中米」という言葉には二とおり
の使われ方があり、一つはメキシコ（カリブ）
を含む広い範囲を示し、他はメキシコを含ま
ない狭義の「中米」すなわち中央アメリカ
（Central America）を指すものであるが、こ
こでいう中米は後者の意味である。

一般に人は最初に知った外国に大きな影響
を受けると思われるが、筆者の場合ラテンア
メリカで最初に足を踏み入れた国がメキシコ
である。メキシコとの付き合いはそれ以来も
う二〇年以上になるが、はじめて中
米を訪れたのはずっと遅く、一九八二
年である。メキシコから陸続きの隣
国であることもあって、筆者が中米
を見るときにはどうしてもメキシコ
と比較してしまう癖があるようだ。

最初に北米（アメリカ合衆国）を知ってから
ラテンアメリカと接触する者の対ラテンア
メリカ観には北米的なバイアスが避けられな
いと同様、筆者の中米観にはメキシコ的なバ
イアスがついてまわるのかもしれない。

メキシコと中米を比べてまずはじめに感ず
るのが中米諸国の国土の狭さであり、逆にメ
キシコの広さである。メキシコ市発パナマ行
のエルサルバドル航空の便に乗ったとき、途
中グアテマラ市、サンサルバドル、テグシガ

メキシコと



中米

（中南米総合研究
プロジェクト・チーム）

石井 章

ルパ、マナグア、サンホセと、中米の全部の
首都にストップする各駅停車便であったが、
メキシコ市からグアテマラ市までが二時間あ
まりかかるのに対して、その後は各三〇分な
いし四〇分の飛行時間で次の国の首都に着い
てしまう。飛行機が離陸して上昇を終えると、
水平飛行する暇もなくすぐ下降姿勢に入らな
ければならない。

メキシコが一九世紀に米墨戦争によって広
大な「北方領土」を失ったとはいえ、なおこ

れだけの国土を維持したことは、その国力を
考えるうえで大きな意味をもつものである。

φ

メキシコの一般庶民の主食はいうまでもな
くトウモロコシであり、トウモロコシの加工
食品であるトルティーヤである。南米大陸に
は、トウモロコシを粉に挽いて加工して食べ
るところでもトルティーヤのような形態のも
のではない。中米ではどうか。筆者の知るかぎ
りグアテマラ、ホンジュラス、ニカラグアに

はトルティーヤがあつて、コスタリカにはな
い。エルサルバドルはまだ行つたことがない
が、地理的位置からして前記三カ国にあれば
エルサルバドルにもあるであろう。

現在のトルティーヤの分布には、先住民イ
ンディヘナの文化の影響をみる事ができる。
すなわちメキシコ中央高原文化（テオティワカ
ン、アステカ等）とマヤ文化を中心とするメソ・
アメリカ文化圏の影響の及んだ地域ではトル
ティーヤがつくられる。一方、インカ帝国を

頂点とする南米のアンデス文化圏、
および両者の緩衝地帯であるコスタ
リカとパナマにはトルティーヤに相
当する食べ物はない。

筆者のみたところ中米のトルティ
ーヤはメキシコのもの比べてやや
小ぶりで、味もメキシコのそれに及ばないよ
うに思われるが、これもメキシコの文化バイ
アスであろうか。

メキシコ南部とグアテマラは民族的、文化
的に近い関係にあり、したがって土着の料理
にも同じ名称の、似たような料理が多い。し
かし酒に関するかぎり、メキシコで最も一般
的な蒸溜酒、テキーラがグアテマラにはない。
原料のマガイが生えているにもかかわらず。
中米で最もポピュラーな酒はラム酒である。